



# やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

## 特別なことは、特別な心持ちで迎え入れる

子どもの頃、年に一度、我が家にお客様がやってきた。それは特別なできごとであり、それを通して自分たち兄弟がどれだけ大きくなれたか確かめられる節目であった。そのお客様というのは、祖父の兄弟で、私たちは仙人のように感じていた。祖父母が客間で談笑しているところに、父母に挨拶をするように呼びだされ、久しぶりに出会う緊張感があるものの、楽しそうな輪の中に自分も入っていきたいという思いも抱きながら挨拶をした。自分のことをみつけてもらおうと、「おお。」とまずは声をかけられ、「大きくなったな。」と頭をなでてもらい、「どれどれ」と決まって私たち子どもの手を取って、やさしくさすりながら「この手はお手伝いをよくしているな。」とか「おじいさん、おばあさんにやさしくできている手だ。」「絵を上手に描いている手だ。」などと言葉をかけてもらった。今なら、互いに家族の近況を報告し合っているからこんなことができるのだと見抜けもするが、あの頃は、「どうして自分のことがわかるのだろうか。ごまかしはきかないぞ。」と、それこそ仙人のようなすごいパワーがあると思っていた。こうして、私たちはいつも以上によい子でいようとし、ほめられるととてもうれしくなって、もっとよい子でいよう、お手伝いもがんばろうとしたのである。子ども用のお土産がなくても、手をやさしく包みこみ、自分のことをよく言ってもらえることが嬉しく、期待しながらその日が来るのを待っていた。

お客様ということ言えば、我が家にはサンタもやってきた。もちろん、実際にその姿を見たわけではない。しかし、これはサンタのしわざだと思えたできごとがあった。ある年の暮れ、母が私たちのいる居間へ現れ、「〇〇さんが子どもたちにどうぞって言って持ってきてくださったよ。」と、手にしたケーキを見せた。そして「やっぱりサンタっているんやなあ。」と言いながら、私たち子どもに食べさせてくれたのだ。私が子どもの頃のケーキというのは、とりわけ私の生まれた田舎ではなかなかお目にかかれない代物だった。大人たちは、一様にうれしいできごとをサンタの心づかいのようにして語り、サンタがどんな人なのかを感じさせてくれた。子どもなりに、なるほどサンタはこうして世界中にプレゼントすることができるのかと納得した。

特別なことは、年の暮れと正月がそうだ。常平生から気にかけている近い人たちや家族と食事を共にし、神さまの前では気持ちを新たにするとともに、新しい年をどのように過ごしていこうかと心を躍らせた。近所の方たちとも、いつもと違う丁寧なあいさつをかわした。身近な人たちみんながあらたまった姿勢で過ごしているその中で、自分もいっしょにすごしていることが、特別なこととして値打ちづける力をもっていたと言える。

やがて平成最後の年の暮れ、そして年明けだ。巷では「平成最後の」というフレーズで特別なもののように宣伝している。子どもにとっては、いつものようにクリスマスでサンタからプレゼントをもらい、正月になってお年玉をもらう流れと受けとめられているだろう。こうなると何がどのように特別なことなのかと困惑してしまう。年の暮れ、そして年明けとせっかくあらたまりのできる特別なチャンスがあるのであれば、それこそ特別な心持ちで迎え入れ、子どもたちとともに味わいたい。

校長 大林 道範